

デンマーク中世都市の類型^①トーマス・リース
鵜川馨 訳

ヨーロッパにおける都市化に関して、少くとも三地域が認め

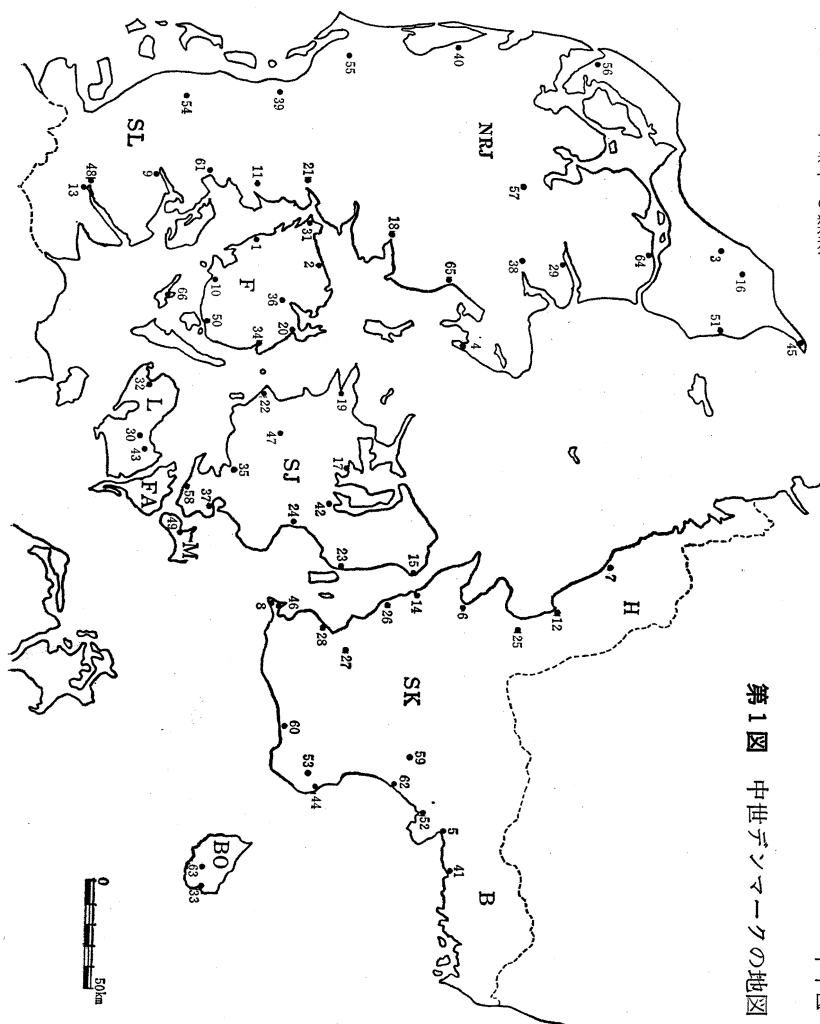
られる。即ちかつてのローマの属州は、たとえそれ以前に遡るとはいえないにしても、ローマ支配下の時期に、すでに都市化をみたのである。ドイツ、フランス、イングランド、ポランドの一部において、中世の時代に、多くの都市が誕生したのに対して、ノルウェー、その支配下にあったフィンランドを含めたスウェーデン、そしてポーランドの一部において、十六世紀、十七世紀が都市化の主要な時代であった。このように、デンマークもまた、中世の時代に都市化が行なわれた地域に属するが、例えばイングランド、フランスに比して、ややおくれ、

デンマーク中世都市の類型

ドイツ東方植民と同時代のことであった。^②

中世の末、即ちデンマーク史では伝統的に、一五三〇年代の内乱とそれに続く宗教改革の時期とされているが、当時のデンマークに、今日とほぼ同数の都市があった。(十六世紀初頭の都市数、八〇〇九〇、今日の都市数、一〇〇〇)しかし、オースン海峡 (Øresund) 以東の諸地方は、約二〇〇の都市とともに、十七世紀中葉の戦争の結果、スウェーデンに割譲され、またスリースヴィ公爵領 (Slesvig) も一八六四年プロイセンに割譲され、七七八の古い都市を含むその南部が一九二〇年以降もドイツ領であったことが記憶されねばならない。従ってデン

第1図 中世デンマークの地図



本頁の地図は Niels Skyum-Nielsen: Kvinde og Slave, København, 1971, の104頁と105頁の間に収められた地図をもとに作図した。

都市・地方一覧表

Byer (Towns) 都市名					
1	Assens	アッセンス	24	Køge	コエエ
2	Bogense	ボーエンセ	25	Laholm	ラーホルム
3	Bornglum	ボーアグルム	26	Landskrona	ランズクローナ
23	Copenhagen	コペンハーゲン	27	Lund	ルント
	/København	(コペンハヴン)	28	Malmø	マルモエ
4	Ebeltoft	エーベルトフト	29	Marjaer	マリャー
5	Eleholm	エッレホルム	30	Maribo	マリボー
15	Elsinore	エルシノア	31	Middelfart	ミッデルファート
	/Helsingør	(ヘルシントア)	32	Nakskov	ナクスコフ
6	Engelholm	エンゲルホルム	33	Neksø	ネクスオエ
7	Falkenberg	ファルクセンベリ	34	Nyborg	ニーストヴェド
8	Falsterbo	ファルスタボー	35	Næstved	ネーストヴェド
9	Flensborg	フレンスボー	36	Odense	オーゼンセ
10	Fåborg	フォーボー	37	Præstø	プレーストエ
11	Haderslev	ハザーズレヴ	38	Randers	ラナーズ
12	Halmstad	ハルムスタット	39	Ribe	リーベ
13	Hedebj	ヘーゼビエ	40	Ringkøbing	リングコビー
14	Helsingborg	ヘルシングボリー	41	Ronneby	ロネビエ
15	Helsingør	ヘルシントア	42	Roskilde	ロスキル
	/Elsinore	(エルシノア)	43	Saxkøbing	サクスクービン
16	Hjørring	ヨアアリン	44	Simrishamn	シムリスハムン
17	Holbæk	ホルベック	45	Skagen	スカン
18	Horsens	ホルセンズ	46	Skanør	スカンオー
19	Kalundborg	カールンボー	47	Slagelse	スラーエスレ
20	Kerteminde	ケアデミーネ	48	Slesvig	スリースヴィグ
21	Kolding	コリン	49	Stegø	ステゴ
22	Korsør	コアソア	50	Svendborg	スヴェンボー
23	København	コペンハーゲン	51	Sæby	セービー
	/Copenhagen	(コペンハヴン)	52	Sølvitsborg	ソールヴィツボー
			53	/Sølvitsborg (ソールヴィツボー)	トーマルツ
				Tommerup	
			54	Tønder	トエナ
			55	Varde	ヴァーデ
			56	Vestervig	ヴェースタヴィ
			57	Viborg	ヴィボー
			58	Vordingborg	ヴァーディングボー
			59	Væ	ヴェー
			60	Ystad	ユイスタット
			61	Åbenrå	オーベンスロー
			62	Åhus	オーフス
			63	Åkirkeby	オーキークビエ
			64	Ålborg	オルボー
			65	Århus	オー(ル)フス
			66	Årskøbing	エアロスクービン
Provinser (Provinces) 地方名					
B Blekinge					
BO Bornholm					
F Fyn (Funen)					
FA Falster					
H Halland					
L Lolland					
M Møn					
NRI Nordjylland					
(Northern Jutland)					
SJ Sjælland (Zealand)					
SK Skåne (Scania)					
SL Slesvig (Schleswig)					

トランプ・中世都市の類型

デンマーク中世都市の類型

マークの中世以降の時期に、ある程度の都市化が進んだが、新しい都市の成立は、ノルウェーやスウェーデンあるいは中世のデンマークの都市化の速度に比較して、遙かに緩慢であった。

このようにデンマークの都市の多くは、中世にその起源を有するのであるが、どれほど古く遡るものであろうか。今日までのところリーベ (Ribe) とヒーズビュ (Hedby) は西暦八世紀まで遡ることができる。ヒーズビュは十一世紀に放棄され、スリースヴィ (Slevig) がその国際貿易を継承したのに対して、最古の都市リーベは、中世都市の一部として存続していったのである。さらにヒーズビュとリーベの都市において、聖アンスガリウス (St. Ansgarus) が九世紀に教会を建設しえたという点で、この二都市は興味が深い。これらの教会は、依然として異教徒の支配する国に建立され、特にこれらの都市を訪れたキリスト教徒の必要をみたすためであったと考えられる。当時のデンマークの中で、教会堂の建立を可能にする程、キリスト教の影響が強かった唯二つの都市としてのリーベとヒーズビュは、国際貿易上重要な都市であったとの印象を暗黙裡に与えるものである。

我々は、リーベ、ヒーズビュ (スリースヴィ)、オー(ル)フス (Århus) の司教が、九四八年インゲルハイム (Ingelheim) の宗教会議に出席していたことを知っている。⁽⁵⁾ 司教の聖別はハンブルグの大司教アーデルダーク (Adeldeg) によっておそくなされたので、この宗教会議は、デンマークの政治に対してド

イツの影響を与える手段とみなされねばなるまい。⁽⁶⁾ この頃までに、オー(ル)フスはかなり重要な都市となった。そのことは考古学的発掘によって確認されている。⁽⁷⁾

中世に成立した第四番目の司教区オーゼンセ (Odense) は、九八八年に司教座として記されており、デンマークのその他の司教区は、その後一〇六〇年にいたる数十年の間に聖別されたのである。中世の司教座の八つのうち七つまでは都市に置かれた。⁽⁹⁾ (四司教座はすでに言及されたが、ヴィボー (Viborg)、ロスキレ (Roskilde)、lund (Lund) が加えられる) 第八の司教座ボェアルム (Borglum) は、同地のブレモントレ修道会の修道院に置かれ、修道僧が司教座聖堂参事会 (domkapitel, cathedral chapter) を構成し、機能していた。⁽¹⁰⁾ さらにハザースレウ (Haderslev) とコペンハーゲン (Copenhagen, København) には、スリースヴィ、ロスキレの司教座それぞれの下に、聖堂参事会 (Kollegiekapitel, collegiate chapter) がおかれた。⁽¹¹⁾

これらの諸都市の市街図——といってもデンマーク近代の最初の地形図が作成された一八六〇年頃の市街図であるが——を比較しても、共通の特徴を見出すことが困難であろう。おそらく最も主要な特徴は、都市内の主要街路として一筋の重要な街道が都市の背骨を形成していることであろう。このことはロスキレ、オーゼンセ、ルンドにあてはまる。オー(ル)フス、ハザースレウ、スリースヴィ、ヴィボー、コペンハーゲンの市街図は

より複雑である。おそらくその理由は、ルンド、オーゼンセ、ロスキレの諸都市が極めて重要な一筋の街道上に位置するのに対して、これらの都市において、ほとんど同じ重要性を有する数本の街道が都市内で交叉していたからであろう。ヴァイキング時代のヒーズビュヤオー(ル)フスにおいて、ある種の都市計画、特に建物用の宅地の割り当てがなされたように推測される。⁽¹³⁾現在の処確定的な証拠はない。しかしながら、(少くとも十一世紀以降)ヴィボーの一部にみられるように、宅地の境界が数世紀にわたって不動であった可能性を否定すべきではない。⁽¹⁴⁾シュトール教授によって監修されているドイツの歴史都市図において、一連の宅地の境界線が、都市内の区画の証左として用いられ、都市拡大の諸段階を反映していることは記憶さるべきである。⁽¹⁵⁾以上の点を考慮に入れて、ロスキレが、過去のある時点で都市計画を行ったことを示唆する都市プランがなかったかと尋ねることができよう。後段で、明白に建設都市である場合について論ずることにしよう。しかしながら、ルンド、ロスキレ、ヴィボーは、デンマークの中でも、特に宗教機関の集中した都市であり、とりわけ、ルンドは中世スカディナヴィアの他の都市よりも多くの宗教機関を有していたことを附言しておきたい。⁽¹⁷⁾教会やその他の宗教機関が奉獻された守護聖人について考察すると、この三都市には注目すべき共通点が認められる。⁽¹⁸⁾おそらくその共通点は、同時代に形成されたもので、中世のある時期にそれぞれ平行して発展したことを示している。

デンマーク中世都市の類型

ヤービト (Saby)、マリーアガー (Marigårn)、マリボー (Maribo) のように、修道院の近傍に都市が発達した。これらの諸都市に共通のことは、教会が都市の中心に位置していないこと⁽²⁰⁾で、かえって都市は主要街道の両側ではなく、片側に成立した。このことは、マリボー、マリーアガーについても妥当する。セービュの場合、河岸に位置するので、より複雑な様相を示している。最後にスコーネ (Skåne) のオーフス (Åhus) は、ルンド大司教に属し、おそらく十三世紀の通常の都市プランを有する都市であることをつけ加えておかねばなるまい。⁽²¹⁾都市発展に対する教会の役割についての諸例を論じてきたが、ここで我々の注意を世俗の影響に向けることにしよう。ドイツの研究では特に、都市法の賦与が都市存立の基準と考えられている。勿論都市のみが特許状を有するが、デンマークでは、正式の特許状を有しない都市があり、その中でも重要な都市は、ラナース (Randers) である。ドイツと同様に、同一の特許状を与えられている都市群がいくつか識別され、ドイツの研究者が「都市法領域」(Stadtrechtlandschaft)と呼んでいる領域が成立している。⁽²²⁾一四三三年トエナ (Tønder) は、リューベックの都市法を与えられた。またリューベの司教の助言を得て推戴され、一六九九年に国王と「国王の要人会」(Majores regni)とによって確認されたリイーベの都市法もまた、リューベックの都市法の強い影響を受けたのである。⁽²³⁾このように、ユラン (Jylland) の南西部とスリースヴィ (Slesvig) の北西部

に、ひとつの小規模な「都市法領域」の形成が認められる。より広汎な「都市法領域」は、ユランの東部、北部、そしてスリースヴィの東部に認められる。この「都市法領域」の中心となつたのは、その成立年代を一二六〇年と一二四一年の間と確定すべきスリースヴィの最古の都市法である。一三二七年までには、ホーセンズ (Hosens)、エーベルトフト (Ebeltoft)、ヴィボー、オー(ル)フスによって直接継受されて⁽²⁶⁾いる。一二四三年に、ヨエアリング (Hjerring) がヴィボーの都市法を用いることを国王より許可されていたので、このことから、一二四三年には、スリースヴィの都市法がヴィボーによってすでに継受されていたことが明らかであろう。十五世紀に、即ち国王クリストファ三世 (Christopher III, 1441-1448) が、ヴィボーに新しい特許状を与えた時代に、ユランの南西部のヴァーデ (Vardø) が一四四二年頃、ヴィボーの都市法を継受したのである。ヴィボーがユラン地方の地方裁判所の所在地であり、かつその裁判集会が政治権力を有していたので、この裁判集会がクリストファをデンマークの新王に喝采をもって承認した二カ月の後に、ヴィボーに対し、一四四〇年の特許状が与えられたことを、戴冠式に際して国王が教会に諸特権を賦与するという初期の慣例に倣ったものと見做すことができる。

しかしながら、デンマークにおける「都市法領域」の最良の例は、ボーンホルム (Bornholm) 島を含むオエアスン海峡以東の諸地方に求められる。即ちこの地方では、すべての都市に

同一の都市法が与えられ、いわゆる「地域法」(birkelov) を有していた。最古の都市法は、かなり確実に、十四世紀前半と推定されるが、それより古いと考える余地がないわけではない。

シェラン島 (Sjælland) では、ロスキレの都市法 (一二六八年) が、ホルベック (Holbæk) によって継承され、修正を施された⁽²⁹⁾。そして、ロスキレの法が、あたかもシェラン島の諸都市——コエーエ (Køge) (一二八八年)、コアソエア (Korsør) (一四二五年)、カルンボー (Kalundborg) (一四二五年以前から)——ローラン島 (Lolland) のサクスコエーピング (Sakøbing) において有効であるかにみえる⁽³⁰⁾。さらにユラン地方やスコネ地方と比較して、シェラン島とデンマークの他の諸島の事情は、それほど確実なものではないことを附言しておきたい。

このようにして、なんらかの類型が、「都市法領域」にもとづいて確定されよう。しかし、次の問題に移る前に、都市法の継承の事実が、領主 (主として国王) による都市建設を物語っていないか検討を加えることが有効であろう。もしそうであれば、都市建設の事実が規則的な都市プランに反映していると想定してさしつかえあるまい。第一のグループの場合、リューベックの都市プランとトエナの都市プランの間に何の類似も見出せない。第二のグループでは、ホーセンズの場合にのみ、なにがしかの規則性を認められるものの、しかしそう断定するには、あまりにも不明瞭である。ロスキレのグループでは、コエーエ、ロスキレのみ、おそらくホルベックもある種の規則性を含

んでおり、これに対してスコーネのグループでは、一四一〇年から一四一三年の間に建設されたランズクローナ⁽³¹⁾ (Landskrona) とソエルヴィツボー⁽³²⁾ (Solvišborg) のみが確実な規則性を有している。ソエルヴィツボーは、その都市法、あるいは、現存する最古の特権⁽³³⁾ (十五世紀) より古い起源を有すると思われるので除外すれば、ランズクローナとコエーエといったごく少数の事例においてのみ、都市法の賦与と都市プランの規則性との間に関連があるものと結論づけられよう。

世俗(領主)の影響は、他の点で、即ち、都市内部にあるいは都市の傍に領主の要塞が存在する場合に、より明確に認められよう。ところで、いくつかの都市は、防備を施されているが、通例、ドイツ、イタリアその他のヨーロッパ諸国のように、市壁と塔によるものではない。木柵と土塁で充分で、しばしば、水路と壕とで補強されている。たとえ、領主(国王)が、都市に防備を命じた場合でも、その費用は都市民によって負担され、時にはある補償が与えられている。防備の痕跡は、今日でも都市プランの上に認められ、特に大通りの存在は、極めて示唆的である。ここで、領主の城塞の役割について検討しよう。

都市内部あるいは都市近傍に城のある都市の地理的分布は、スリースヴィ大公領、ユラン南部、オエアスン海峡以東の諸州、さらにデンマーク海峡(オエアスン海峡と二つの海峡)の地域、バルト海沿岸の処々に、特に夥しく、換言すれば、他の

諸地域に比して外敵(この場合ノルウェイを指す)の脅威にさらされることが少いと思倣されたユラン北部を除く国境の地域である。おそらく、このことは、北海からバルト海に入り、現在のスウェーデン南部の沿岸を航海する商業路として持つ重要性に比して、ユラン北部が軍事的価値が低いことを示すものと理解されるべきであろう。

城のある都市の大多数は、城が都市の内部にあるのではなく、都市の近傍にある。しかし、特にカルンボーとヴォーディングボー(Vordingborg)に顕著であるが、城が都市プランのついたりではなく、その一部である事例が若干みられる。特にカルンボーの場合、城が、教会を含めて、初期の中世都市全城を包摂しようである。明らかに、この城壁をめぐるした都市は、すでに存在した村落に隣接して建設され、村落⁽³⁵⁾の教会は、中世の間都市内の教区教会として存続したのである。またヴォーディングボーにおいて、城が都市の中心に置かれたが、都市の民家の部分を包摂しなかったようである。ヴォーディングボーとカルンボーは、おそらく、十二世紀後半、戦略的拠点に、前者は国王によって、後者は国王の腹心の一人によって建設されたのである。⁽³⁶⁾ 城と都市とが同時に建設されたという事実が、都市プランにみられる城の地誌的統合を説明している。

ここで設問をかえて、都市の周辺部、あるいは、都市のごく近隣のつかけりの部分に、城が位置する都市について、そのことの意義を問うことにしよう。即ち、城の建設が都市建設よ

り後であったといつてよいであらうか。あるいは都市が城下(suburbia)に完成したとみてよいであらうか。多くの学者は、前者の仮説の可能性を検討することもなく、後者の仮説を取り入れている。ここでは前者の説を考慮する余地がないか確かめるべく検討を加えてきたのである。しかし徹底した地誌学的研究も、考古学的研究も、まだ充分でなく、これらの諸研究の進展した暁には、新しい知見がつけ加えられ、ここでの一応の結論の修正をせまることとなろう。

王家が、都市の成立した土地を所有し、また一二三〇年代からの王室の収入表に一連の都市名が記されていると、しばしば述べられてきた。⁽³⁷⁾しかしながら、ここで問題にしなければならぬことは、ここに都市が登場するのは、国王がその土地を所有するが故か、あるいはまた、王室の収入——これは国王の特権によって都市あるいは他の人物に譲渡しうるのであるが——がその土地に対して生じるが故かということである。もし後者の説が正しいとすれば、都市の当初の所有者が一体誰であるか、即ち国王か、都市自体か、確認することが極めて困難である。

国王の特権によって処分された都市収入は「レガリア」(Regalia)と呼ばれる種別の収入に属していた。このことは、デンマークの国王特権に述べられているそれと、一一五八年ロンカリアの帝国議会によって、皇帝フリードリヒ・バルバロッサのためになされた「レガリア」についての定義を比較すると明白

となる。⁽³⁸⁾農村地域の場合、ある一定の領域から納付される額は、稀にしか変化しない。これに対して都市の収入が、一二三〇年代以降の王室の収入表に固定額として記入されなかったことは、都市の「レガリア」の性質に照らして明らかである。というのも、レガリアの一部は毎年繰り返えされる固定額ではあるが、他の一部は、例えば難破船、後継者を欠く財産、裁判手数料と年毎に変動するものであるから、従って一四〇〇年にいたるまで、数種の都市レガリアが、毎年変動しないひとつの収入項目に統合することはなかったし、⁽³⁹⁾その時には、十二世紀のレガリアの大部分はもはや存在しないか、その重要性を失っていたのである。

それ故に、一二三〇年代の王室収入の目録に記載された都市は、国王が通常の都市レガリアを受けていた都市のみであったと解釈されるべきものである。それは、都市の起源について何も明らかにしていないし、またある都市の記載を欠くとしても、一二三〇年代にその都市が存在しなかったことを必ずしも意味しない。都市がまだ存在しなかったが故に記載されなかったこともあろうが、他の場合には、レガリアが国王以外の者によって受領されていたかもしれない。もしそうであったとすれば、王室の収入表に記載されていなくても何の不思議もない。

デンマークにおけるレガリアはいつまで遡れるのであろうか。現存する最古の特許状に、すでにレガリアについての言及があり、⁽⁴⁰⁾少くとも十一世紀からデンマークでは知られている。

古文書が散佚していて直接の証拠はないので、それ以前にレガリアが遡るものと推測しうるが、デンマークより古文書の保存のよいイングランドの例と比較してみると、むしろその推測は成り立ちがたいようである。北ヨーロッパ地域の海浜、難破船に関する特権が分析されたが、イングランドとデンマークにおいては、それが十二世紀初頭にあらわれた。デンマークにおいては、レガリアは、十一世紀後半に属すると断言してさしつかえあるまい。しかし、同時に、いくつかの都市、とりわけ司教都市はすでに存在していて、その歴史は一世紀以上にわたっていた。少なくとも歴史の古い司教都市のうち、リーベとスリースヴィは、都市の外に、あるいは都市に隣接して城が置かれ、両者の場合、海路あるいは陸路の入口に置かれていた。リーベにおいて、海から川への水路を扼する場所に築かれた城の発掘は、十二世紀中葉に遡ることを明らかにし、スリースヴィにおいて、見張りの塔が、明らかに一二〇年代に、海からの入路に沿って数カ所に築かれ、スリースヴィの現在の都市は、十一世紀にまで遡及しうるのである。⁽⁴⁴⁾

二都市の証左は、城が最古の都市と同時代のものではなく、後に、おそらく十二世紀初頭につけ加えられ、都市の入口に置かれたという地誌的結論を支持している。勿論、これらの施設は、敵の艦隊や海賊を見張る物見の塔として役立ちえたが、内陸部の塔について、たとえそれが内陸部に侵入した敵軍の動勢を監視しうるとしても、同様の説明は必ずしも有効でない。海

デンマーク中世都市の類型

からスリースヴィへの入口にある塔で、関税が船から徴収された。⁽⁴⁵⁾ 都市の近くの塔あるいは城を建設する理由のひとつは、レガリア、特に関税の徴収についての関心からであったのではないだろうか。二都市において、塔または城が、十二世紀の初頭に築かれたのは、レガリアの導入と同時代であったことを考察してきた。おそらく、このことが、十一世紀後半以降認められる王権の伸長の証拠とみなされよう。

たとえ私のこの仮説が、前述の二都市即ちスリースヴィとリーベについて正しいとしても、新しい都市について必ずしも有効ではないとの異議が提起されうる。たとえば、スコーネの市のたつスカンオェア⁽⁴⁶⁾ (Skane) やファルスタボー⁽⁴⁷⁾ (Falsterbo) のように、城の近傍に都市が成立した。しかし、いくつかの事例において、都市の近傍に、城あるいは軍事的施設の建設が行なわれたのは、その定住地が極めて繁栄し、たとえかりに城や塔の建設に多額の資金を投じたとしても、それを償ってあまりある程レガリアの徴収を可能とした証拠とみなすことができる。スカンオェア、ファルスタボーの事例は、まさにその例である。というのも、スカンオェア、ファルスタボーの城はたしかに市の興隆をもたらした漁場の成立より新しいからである。そして都市の周辺の城や塔の存在と並んで托鉢修道会の存在は、都市の経済的発展の徴候であり、この種の築城は、都市生活のかなり後期になされたものと考えられるのである。

いくつかの都市について、それらが建設都市であり、従って

デンマーク中世都市の類型

そこに規則的なプランを想定しうる。そのような事例は、一四一〇年から一四一三年に建設されたランズクローナと（一四二六年に特権を附与された）ヘルシンゴア（Helsingør）にのみ認められる。⁽⁴⁹⁾このふたつの事例において、直角に交差する街路の直方形のブロック状の都市プランを創出するに足る空間が存在した。他の新都市の場合、一四一六年に建設されたマリボールの大規模の長方形の市場広場のみが都市計画の痕跡を残している。コアソアはエリック七世（Eric VII, 1412—1439）の治世下に要塞の近くに移転され、岬に置かれた。それはヘルシンゴアやランズクローナのように、都市プランをくりひろげる程充分な空間が存在しなかったことが理由であろう。ハルムスタド（Halmstad）は、一二三二年におそらく移動されたが、規則的な都市プランは、一六一九年の大火後にはじめて作られたようである。⁽⁵⁰⁾

いくつかの都市をグループにわけると、少くとも二類型おそらく三類型のプランが識別されうる。最も単純なプランは、ドイツの研究者が「主要街路単線型都市プラン」(Einstraßenplan)と呼ぶもので、一筋の街路が、都市プラン全体を支配している。多くの場合、この類型の都市は小規模で、通例、主要街路が都市を貫通する街道である。最良の事例は、おそらくホルベックの事例で、主要街路が多分市場の広場として機能した。それは、丁度、一五二〇年代に市場広場が創設されるまでのフュン（Fyn）島南部のスヴェンボー（Svendborg）の町のように

一二二

あった。⁽⁵¹⁾さらに一五一六年、クリスチャン二世（Christian II, 1513—1523）によって建設され、「主要街路単線型都市プラン」を有するエンゲルホルム（Engelholm）を忘れてはならない。⁽⁵²⁾例えば、トエナにみられるように、「主要街路」の都市プランが、明白に規則的都市プランに発展する事例がある。トエナでは街路名は、いくつかの街路が建物の背後に漸次形成されたことを物語っている。このようにして、トエナでは、四本の街路が「厩舎の背後」と呼ばれ、これら四筋の街路は、主要街路と平行して走っている。同様の発展は、ハールランド（Halland）のファルケンベリー（Falkenberg）にみられる。⁽⁵³⁾

私の知るかぎり、三都市のみが、いわゆる「主要街路複線型都市プラン」(Zweistraßenplan)の例として慎重な考慮に値するにすぎない。三都市は、ひとつの重要な特徴を共通に持っている。即ち、街道がその都市内で終っていることである。さらにそのうち二都市ミッドデルファート（Middelfart）とボーエンセ（Bogense）は、ユランとフュン島の間の「小瀬戸」の渡航の乗船の場所であったのに対し、第三の都市プレスト（Præstø）は、かつて島であったか、後に半島となった処に位置していた。しかしながら、これらの都市に共通の起源、たとえば都市建設といったことはありえない。というのも、都市プランのみが、主要な特徴として対応するものの、教会の位置、市場の広場の位置といった細部について、プランの類似性がないからである。このようにして、都市の一般的立地、都市と街道との関

係が決定的な要素であつたにちがいない。

都市プランの最後の主要なグループは、碁盤目型、あるいは、その他の規則的プランのそれである。表面的にみれば、そのようなプランは、都市が新規に建設された証拠であるが、前述の主街路の背後に平行して形成された裏道の例が、この種の性急な結論に警告を発している。いくつかの都市については全く疑問の余地はない。例えば、ランズクローナのように「新規に」建設された場合、少くともヘルシンゴエアのように、新しい立地に移された場合のように。他の場合、ラーホルム (Laholm) とソエルヴィツボーによつて最もよく例証されているが、「新規に」建設された結果として、あるいは大火の後に再建された結果として、都市の一部が規則的なプランを有する。ラーホルム、ソエルヴィツボーのプランを一層興味深いものとしているのは、市場広場を区画する際、同じ物指しが用いられた事実であり、しかもその物指しがグラバントのエル尺度であつたことである。その年代は確かでないが、(これら二都市について文書史料は、多くの情報を与えてくれない)⁽⁵⁴⁾ 十三世紀の第二四半世紀と推定されよう。しかしながら、今後の研究がより確実なものとするであらう。

その起源が不明である規則的プランを持つ都市について考察を進めよう。前述の裏道の事例だけでなく、自然発生的な規則性が成立するのを認めることができよう。即ち、海浜あるいは川岸に併行して街路が走り、その街路から数本の小街路や小路

が主街路に直角に交わりながら主街路と海岸とを結ぶことがある。ファルケンベリーやスヴェンボーがその例である。⁽⁵⁵⁾ 少くとも後者の事例では、その地形からして、都市計画が成立しえないことを示している。オルボー (Ålborg) において、小川の流れが変えられ、都市内を四本の運河となつて流れ、水車を回転させ、一般に市民に用水を供給することを目的とした。⁽⁵⁶⁾ いくつかの道は運河に沿つて走り、その背後に裏道が通じ、オルボーのプランに規則性を与えたのである。

三都市即ちケルテミーネ (Kerteminde)、エアロエスコエーピング (Årskøbing)、ステエ (Steg) は、規則性のある三角形の都市プランを有する。ケルテミーネの場合、このことは、おそらく岬に位置していたという事実にもとづいている。かりに街路が海岸に平行に走れば、それぞれ直角に交叉することになる。ランズクローナを建設し、ヘルシンゴエアを移転させたエリック七世から、この都市が最も古い特権を獲得していたにしても、⁽⁵⁷⁾ この規則性が国王の主導によるものと断言することにはいささか躊躇を感じる。このことはステエについてもいえる。⁽⁵⁸⁾ しかしエアロエスコエーピングは、岬に建設されたわけではないが、整然とした三角形の都市プランを有し、慎重な都市計画を想定せしめる。一二三五年頃から一二五〇年の間に都市計画がなされ、ブランドンブルグ (Brandenburg) 都市プランから影響を受けたものと推測される。⁽⁵⁹⁾ シェラン島のコエーエや西ユランのリングコエーピング

(Ringkøbing) では、街道が都市の中心で直角に交叉している。他の街道は、すべてこれら二筋の主要道に平行している。街路間の街区は、むしろ長く、狭い。コエエの市場広場は、主要街路の交叉点に位置している。コエエは、十三世紀末に建設されたようである(最古の特権は一二八八年で、都市の空地に家を建てる人々を誘置している)、リングコエーピングもほぼ同じ時期に建設されたと推定される。というのも、両都市の都市プラン上の一致は、偶然というにはあまりにも多いからである。フュン島の「小瀬戸」側のアッセンス(Assens)は、コエーピングコエーピング型と対比される都市プランを有している。しかしアッセンスの場合、街区はより正方形に近い。アッセンスは、「小瀬戸」の渡航上重要な地点であり、一二三一年にすでに文書に言及されているので、アッセンスの建設は、十三世紀とあえて断定しうる。

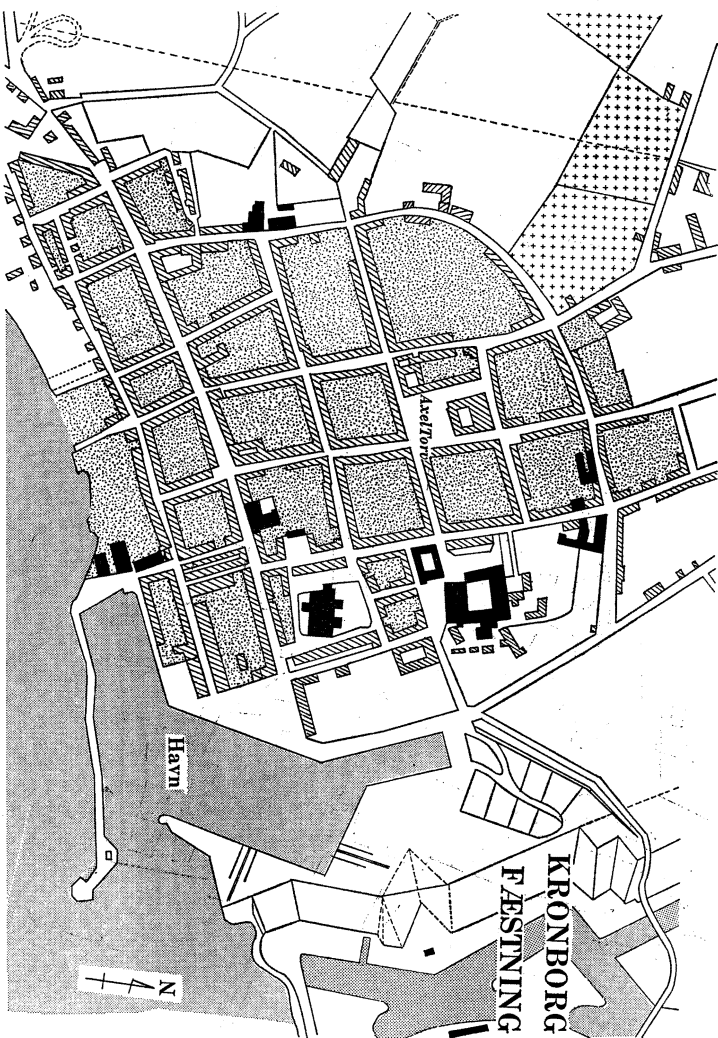
スコーネの市、スカンオエア、ファルスタボーの両都市は、規則的な都市プランを有している。おそらくこれらの都市は、国王の建設にかかわるものである。⁽⁶³⁾ オーフスの規則的都市プランは、最古の集塊化よりも、新しい時代のもものと推定され、おそらく大火の後の再建の結果であろう。⁽⁶⁴⁾

すでに述べたように、ロスキレの都市プランに規則性の要素が認められる。このことは、都市の中央にのびる街道が直角に交叉する事実に由来するのであろう。ある種の都市計画があったと推定されるが、考古学的研究の結果を検討しないで、正確

な年代を確立することは困難である。しかしこの都市の起源は極めて古く、新たに建設されたことはありえないし、大火または戦争による荒廃の後に再建されたのであろう。

本稿を閉じるにあたって要約を試みよう。教会の影響は、都市プランに通常多くの痕跡を残さなかった。また多くの場合、城は都市の成立より後の時代に建設されたものである。小数の都市は、ある種の計画性を窺わせる規則的な都市プランを有しているが、多くの場合、規則的特徴は他の形で説明されよう。この点で、地形上の条件が決定的であり、都市プランの形成にあたって、最も決定的な要素であったと主張しなければならぬと考えられるものである。

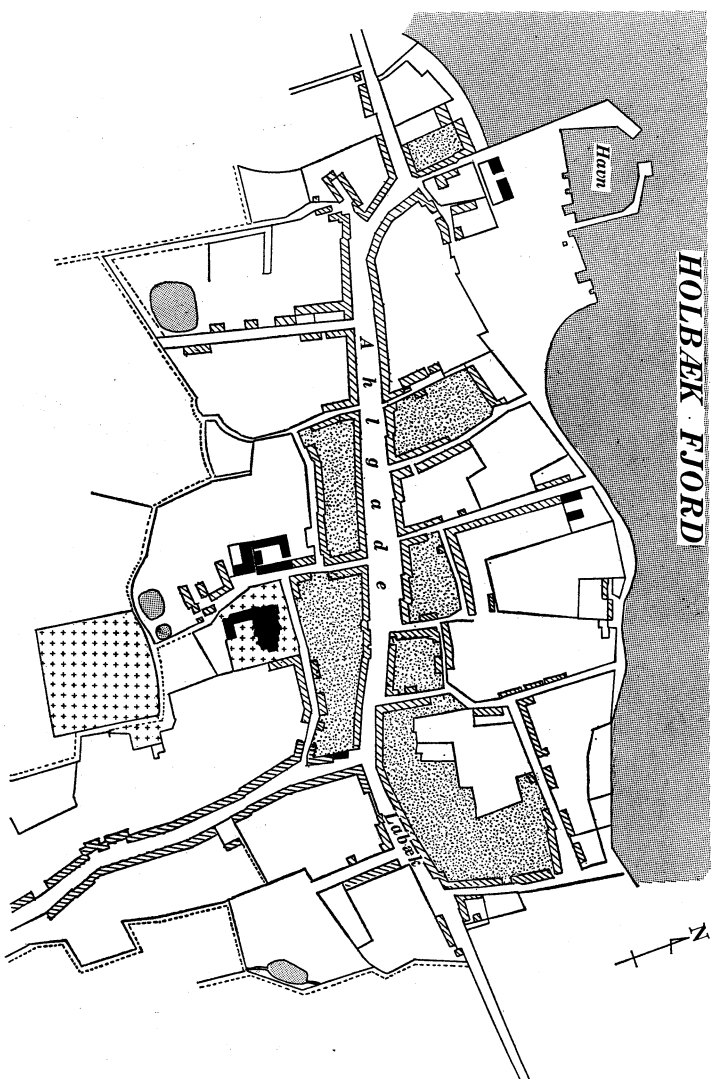
第2図 ヘルシンキエラ都市プラン (Helsingør, 1859)



J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図 (注12参照)

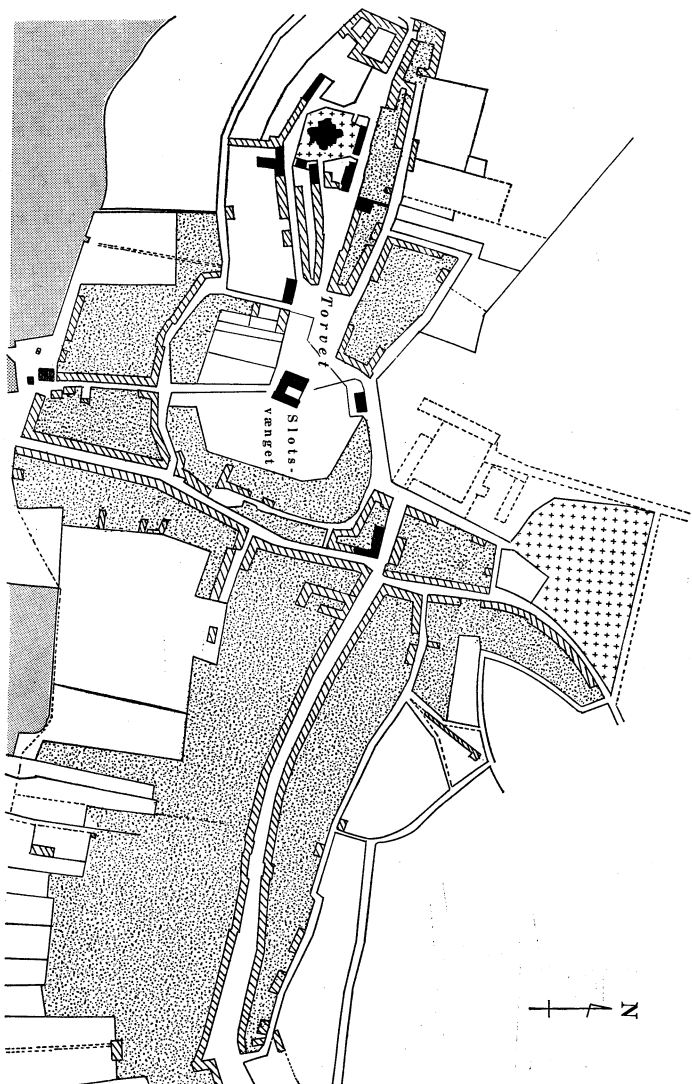
デンマーク中世都市の類型

第3図 ホルベック都市プラン (Holbæk, 1859)



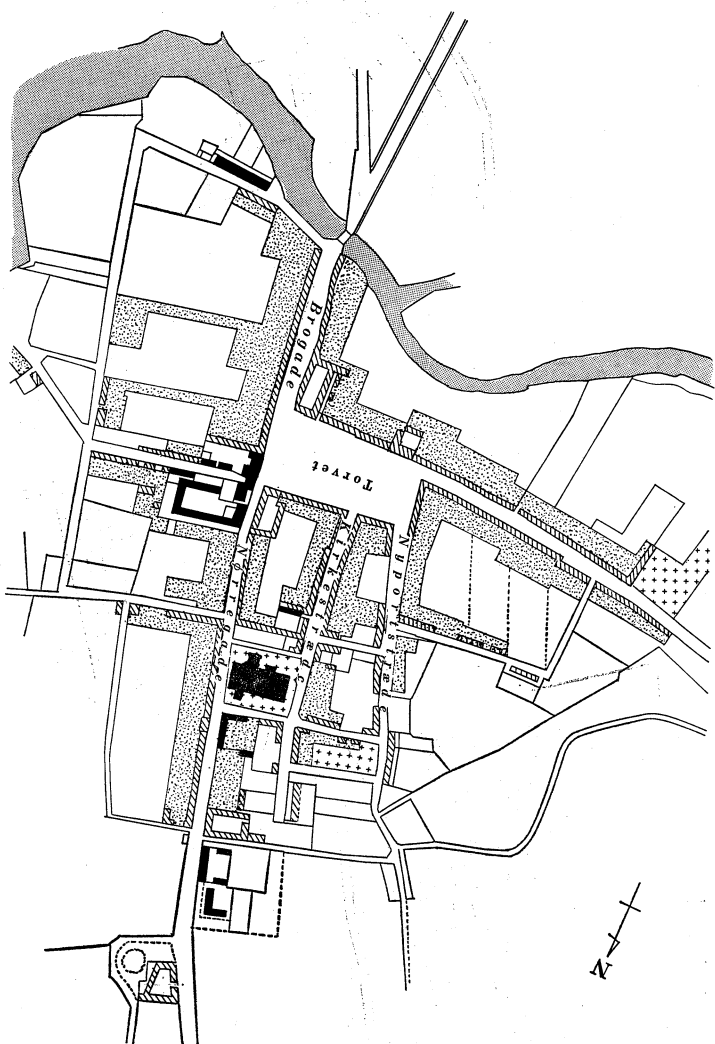
J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図

第4図 カルンボー都市プラン (Kalundborg, 1859)



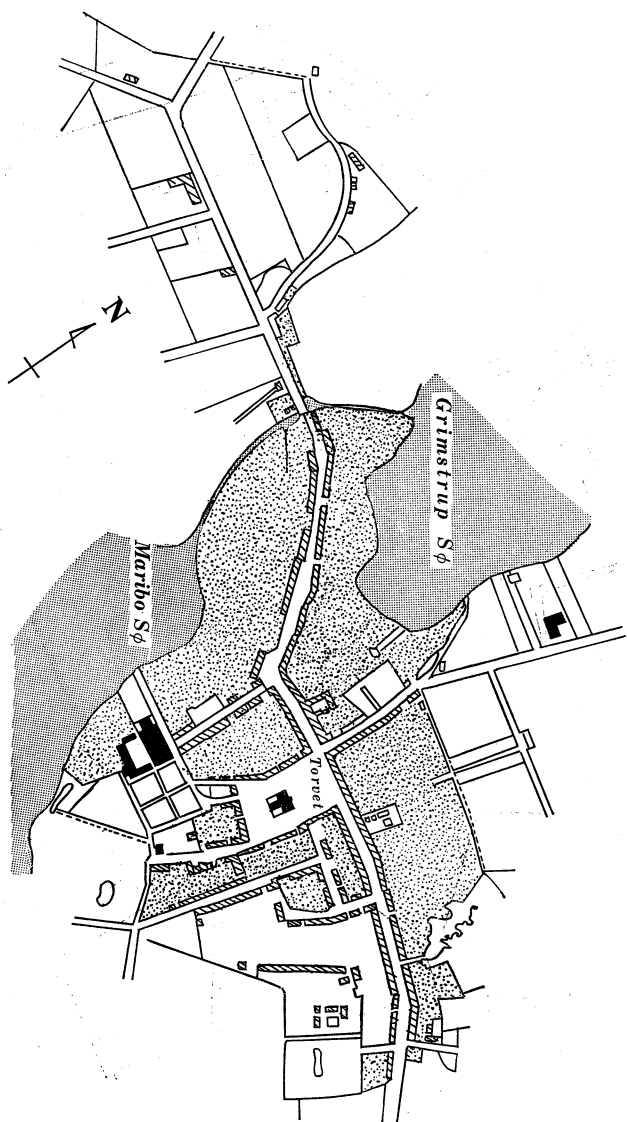
J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図
デンマーク中世都市の類型

第5図 コーヒ都市プラン (Køge, 1859)



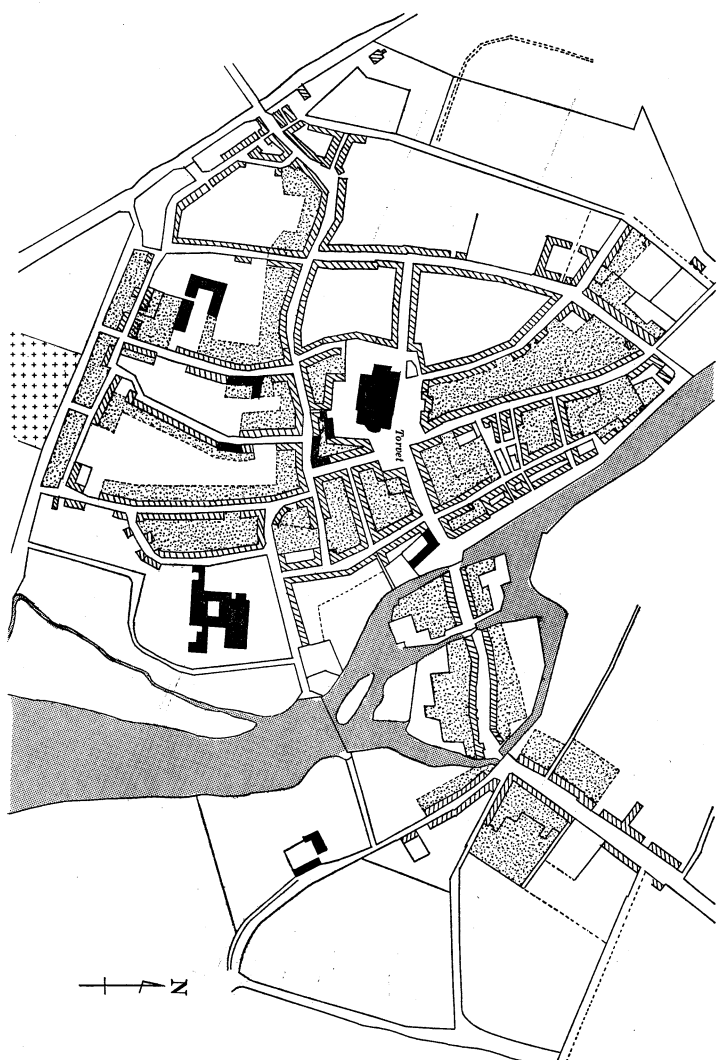
J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図

第6図 ヲリボー都市プラン (Maribo, 1859)



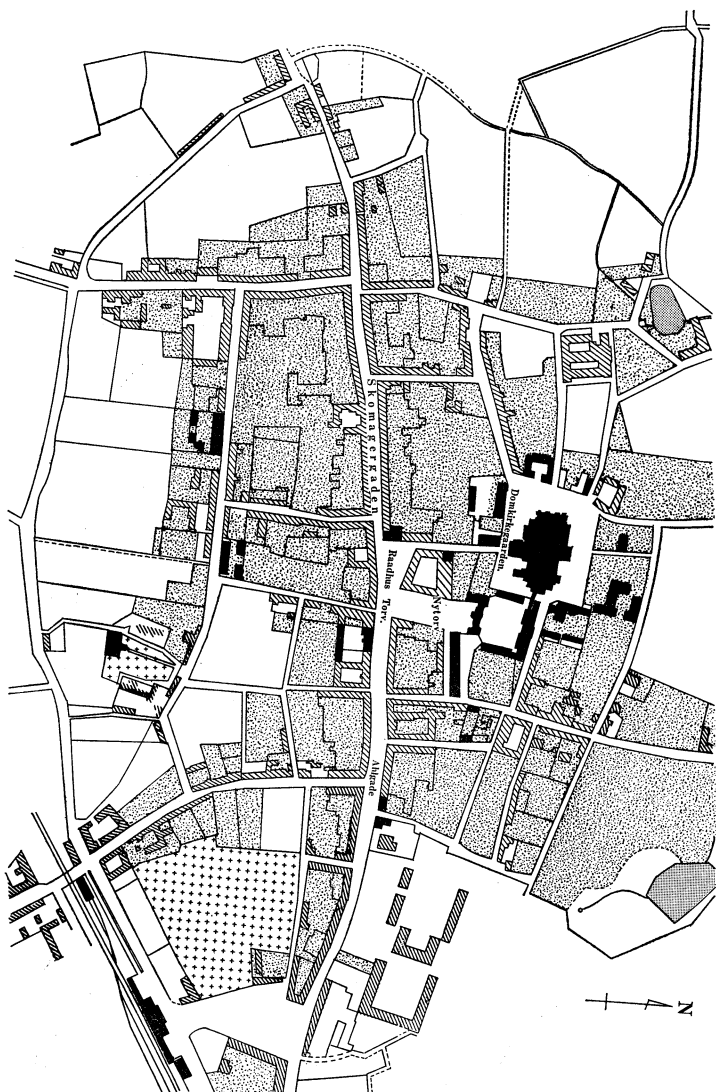
J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図
デンマーク中世都市の類型

第7図 リーベ都市プラン (Ribe, 1858)



J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図

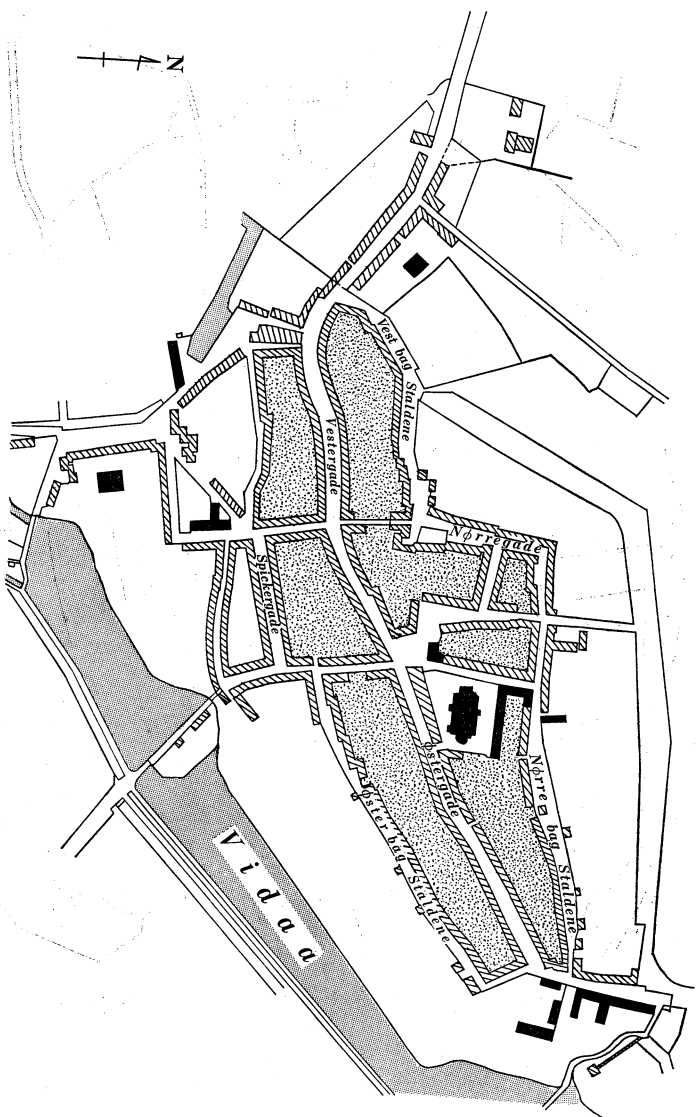
第8図 ロスキリ都市プラン (Roskilde, 1858)



J. P. Trap : Danmark, 1858—1860. の地図より製図

デンマーク中世都市の類型

第9図 トェナ都市プラン (Tønder, 1862)



J. P. Trap : Slesvig, 1864. の地図より製図

補論 都市プランの永続性

宅地の境界を含めて「都市プランの永続性」を、普遍妥当性を有する史的原理と考えるべきか否かが問題である。このことを論ずるに当って、街路の永続性と宅地境界の永続性とを區別すべきである。オーフスにおいて、街路の方向に関する規制が大火の後に行なわれたが、他方一七二八年と一七九八年の大火の後、コペンハーゲンにおいて行なわれた規制は、比較的控え目なものであった。しかし、多くの方形広場が、十六世紀中に、かつて教会の所有にかかる土地に創出された。⁽⁶⁷⁾ 方形広場の創出は、多数の教会関係の施設をともなった部分において、特に認められる現象であった。規模の小さい都市では、ひとつないしふたつの教区教会しかなかったため、宗教改革の結果、都市プランに大きい変化をみなかった。一三〇五年、オー(ル)フスの司教と司教座聖堂参事会は、墓地を拡張すべく、街路の一部を入手することを国王から認可され、ソエルヴィツボーにおいては、教会がかつての街路上に建立さるべきことが提案されたのである。⁽⁶⁹⁾

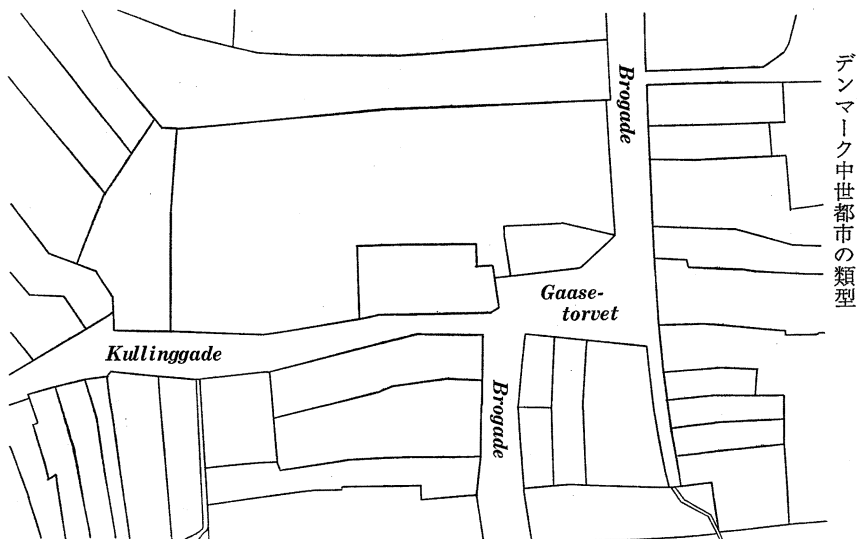
これらの事例から、街路のコースは時に変更を蒙るものと結論せねばなるまい。そこで次に、宅地の境界は、固定的であったか否か論じなければならない。⁽⁷⁰⁾ フォーボー(Feborg)とアッセンズにおいて、本来の宅地を再現する試みがなされた。しか

デンマーク中世都市の類型

しながら、デンマークの大多数の都市において、宅地の境界は、一八六〇年代の測量によって知られるようになり、一八六〇年代当時の現実の姿を示すにすぎないことを銘記しなければならぬ。スヴェンボーの事例は、その典型例であろう。測量は、一八六三年の法令によって実施され、一八六九年にその精度が試され、街路と宅地を示す地図が一八九一年に確認されたのである。⁽⁷²⁾ スヴェンボーの市場広場は、一五二〇年代にはじめて創設されたので、初期の市場は、市の南西部、ゴーセ広場(Gæstehave)にあつて、最も古い定住地は、浜辺に近いこの地にあつたのである。⁽⁷³⁾ この結論は、宅地の境界と矛盾するものでもなく、かえって、この地区に、かなり長い歴史を持つ定住地を暗示する細長い宅地を見出すのである。しかしながら、初期の中世の市場は、他の処にあつたものと考えられ、⁽⁷⁴⁾ その結論は、ゴーセ広場の近くの宅地から発見された珪藻土の分析によつて確認されている。事実、この地区は海面におおわれていたが、浜辺に極めて近くにあつた地区である。⁽⁷⁵⁾

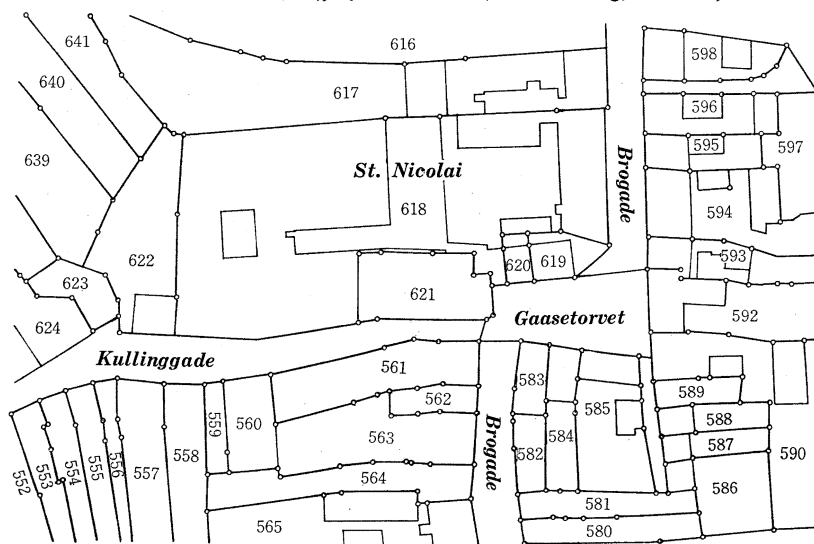
オルボーにおいて、宅地の境界は、一八七二年と一九七一年の間に、大きい変化があつて、初期の宅地や川の流れを復元することは冒険といわねばなるまい。一八八五年、または一九四八年といったいわば中間期の地図ではなく、一九七一年の測量図さえ保存されていたとすればよいのである。⁽⁷⁶⁾ 同様の状況が、スヴェンボーにいえよう。一筆の宅地に統合される過程や、もとの大きい宅地が分筆される過程についての知見にもとづいて、

第10図 ゴーセ広場 (Gaasetorvet, Svendborg, ca. 1790—1791)



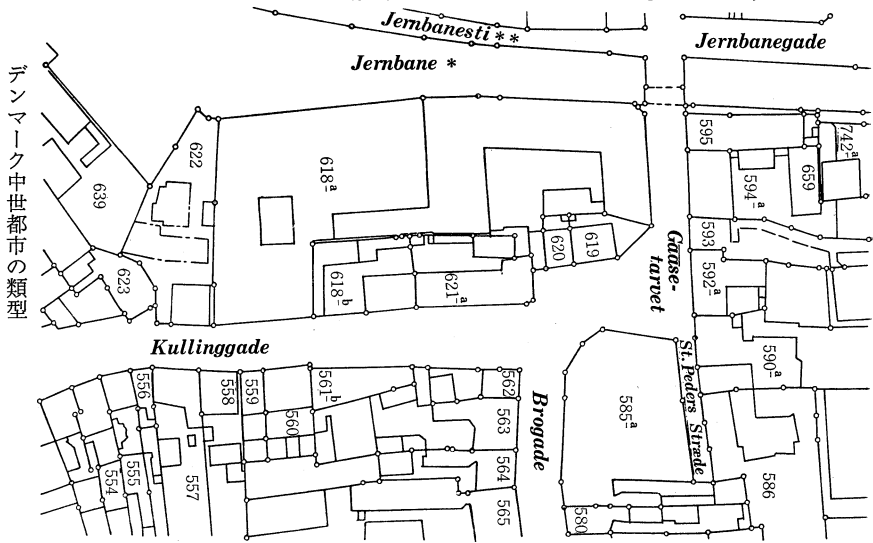
筆者による復元図

第11図 ゴーセ広場 (Gaasetorvet, Svendborg, 1860's.)



Matrikeldirektoratet (København) の原図より転写

第12図 ゴーゼ広場 (Gaasetorvet, Svendborg, 1950's.)



測量事務所の原図より転写 (* 鉄道施設, **鉄道路)

我々は十八世紀以降の宅地の境界を復元することができる。スウェンボーの場合、史料が豊富であるので、一七九〇年から一七九一年にかけての時期がえらばれた。一七九〇―一九一年と一八六〇年代との間の時期の一般的発展は、大きい宅地が小さく分筆され、これらの小さい宅地が、一八六〇年代の測量図に正しく示されている。検討された地区について、一八六〇年代から二十世紀中葉までの約百年間の宅地の変動は、一七九〇―一九一一年から一八六〇年までの期間の変動より緩慢であった。⁽²⁸⁾一八七〇年代の鉄道建設を別とすれば、宅地の境界は、新しい宅地への分筆の形で、時折変化したにすぎない。しかし小宅地が統合された事例が少くとも一例ある。この種の型の発展は、都市の他の地区で必ずしも典型的ではないが、最も古い測量図に示された宅地の境界は、他の史料の助けを借りなければ、より古い時代についての資料として利用すべきでないことを明確に例証している。

街路と宅地の境界の永続性に関するこの論議の結論は、次のようであろう。即ち、最古の信憑性の高い測量図上の街路と宅地境界は、他の史料から得られ知見と注意深く対照することによって、はじめて都市プランの復元のための史料として利用することができる。宅地の境界の変化は、少くともある時期にむしろ頻繁であったので、宅地の境界より街路のコースがより固定的と考え、従って古い都市プランの復元に、より信頼性の高い史料であると考ええることは大胆にすぎるとはいえないであ

う。

- (1) 本稿は、一九七八年四月二十二日、立教大学で開かれた「比較都市史研究会」でなされた報告。一九七八年九月十四日、ロンドン・ヤン大学でなされた報告をもとに加筆されたものである。
- (2) エロマンの都市化諸段階に関しては、一九七六年ヤン・ペーと開かれた「都市史研究国際委員会」の報告書、特にヤン・教授 (Prof. Higonet) の論文の参加。トーマス・リースによる結論は、参考文献を参照せよ。Thomas Riis and Poul Strömstad (ed.): *Le pouvoir central et les villes en Europe, du XV^e siècle aux débuts de la révolution industrielle* (Byhistoriske Skrifter I), Copenhagen, 1978.
- (3) Volker Vogel: *Ausgrabungen in Schleswig* (Kiel papers 72 *Frühe Städte im westlichen Ostseeraum* (ed. Hermann Hinz), Neumünster, 1973), S. 96. Cf. Henrik M. Jansen, Tore Nyberg & Thomas Riis: *Danske byers fremvækst og udvikling i middelalderen* (Origins and Medieval Development of Danish Towns), in Grethe Aulén Blom (ed.): *Urbaniseringsprocessen i Norden I: Middelaldersteden*, Oslo-Bergen-Tromsø, 1977, pp. 16—25, figs 5 a-d.
- (4) Wolfgang Seegrün: *Das Papsttum und Skandinavien bis zur vollendung der nordischen Kirchenorganisation* (1164) (Quellen und Forschungen zur Geschichte Schleswig-Holsteins 51, Neumünster 1976), S. 37—38. Cf. Aksel E. Christensen: *Vikingetidens Danmark paa oldhistorisk baggrund* (Viking Age Denmark and Its Iron Age Background), København,

1969, p. 137.

- (5) *Diplomatarium Danicum* (以下 *Dipl. Dan.* と略記す) I 1 no. 319.
- (6) Adam Bremensis: *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, ed. Bernhard Schmiedler, 3 ed., Hannover & Leipzig, 1917, S. 63—65. Askel E. Christensen: *Vikingetidens Danmark*, p. 226. ノルマン人のアダムによれば、後の皇帝オットー一世がデンマークに対する軍事的遠征を率い、彼の勝利となった会戦の結果、平和が訪れた。即ち “Tandemque condicionibus ad pacem inclinatis Haroldus Ottoni subicitur, et ab eo regnum suscipiens christianitatem in Dania recipere spondit.” 表題は、ノルマン人のアダムは、オットー一世のデンマーク遠征をオットー一世のそれと取り違えている。編者の六三頁の注一と八二頁の注二を参照せよ。今日、大司教アーデルスタークがその在位第十一年に三回教を聖別したという事実が疑わしくなった。(Askel E. Christensen: *Vikingetidens Danmark*, p. 226) その聖母は、九四八年一月二日付の教皇の確認状、就中デンマーク・ノルマディ・スウェーデンの司教に対するハンブルグの大司教座の優位は、間接の確認は、偽書である。(Dipl. Dan I 1 no. 318, cf. no. 28)
- (7) アダムは、これらの事件が実際に起きた一〇〇年後と記している。同、ハンブルグ大司教座から独立したデンマークの大司教管区を設立するべく、教皇とデンマークの間で直接の接触が成立した時点で、アダムはこれを記している。(Erich Caspar: *Das Register Gregors VII*, 3 ed., I Berlin-Dublin-Zürich 1967, lib. II: 51 S. 192—194; *Dipl. Dan. I 2* no. 11) 従って、アダムは関心事

- は、デンマークの教会が常にハンブルグの支配下であったことを証明することであった。図 10 図に示せば(大司教の11〜13世紀)ハンブルグの大司教は、大司教の通常の権限として、その大司教管区の司教を聖別する権利を得ていたこと。しかし三名のデンマークの司教はそれ以前で聖別されたことがあった。cf. Niels Skyum-Nielsen : *Das danische Erzbistum vor 1250* (Acta Visbyensia III) Visby, Göteborg, 1969, S. 129—130. 他方、ドイツの強大な影響力は、九六五年六月二十六日のオットー一世の特権状によって例証されよう。即ちスリースヴァーリー・オー(ル)ノスの教会の土地並びに、そこに居住する独立してない農民は、皇帝に対する役務、租税から免除されたこと。(Dipl. Dan. I 1 no. 330).
- (7) H. Hellmuth Andersen : *Århus in der Zeit von 900 bis 1200 n. Chr.* (Vor- und Frühformen der europäischen Stadt im Mittelalter II (Ed. Herbert Jankuhn, Walter Schlesinger & Heiko Steuer) Göttingen, 1974), S. 96—98.
- (8) スリースヴァーリー・オー(ル)ノス・オーセンヤの諸教会と関して、九八八年三月十八日オットー三世によって与えられた皇帝免税において、この特権は、九六五年にオットー一世によって与えられた免税の確認と拡大と考えられたことがない。前出注六を参照せよ。(Dipl. Dan. I 1 no. 343).
- (9) Adam Bremensis, pp. 230—231. cf. Skyum-Nielsen : *Das Danische Erzbistum*, S. 113—114. 1011年以降、ロスキレの主教座の存在は、史料でもよく確実である。(Skyum-Nielsen, loc. cit.) 1049年と1057年の間に、ヴァーボーで司教座がおかれた。(E. Levin Nielsen : *Stadenstehing und Thinginstitution*.

- Die wikingzeitlichen Bestattungsspurten in der Stadt Viborg (Danemark) und die Frage der Errichtung des jütischen Zentralbistums (Vor- und Frühformen der europäischen Stadt im Mittelalter II (Ed. Herbert Jankuhn, Walter Schlesinger & Heiko Steuer), Göttingen, 1974), S. 75.
- (9) 昭々たる、1060年頃と同教区で設けられた、この「北」の領域、ヴァンボーレン(Vendila) (今日のヴァンマン・マル(Vendysse-nd)とリム・映鏡(Limfjord) (北の地方)のみが言及されたことである。(Adam Bremensis, p. 230, 1. 11—13.) 1134年の「スクリプテス・ミノレス・ヒストリア・ダニカ・メディ・アエリ(ced. M. Cl. Gertz) I, København, 1917—1918, p. 29, 1. 11—14). ムス・カ・マ・リヤ・映鏡の北に位置するこの「大聖堂」の地は、たまたまである。この1134年頃、スクリプタ・メディ・アエリに言及されたこと。(Dipl. Dan I 2 no. 77, cf. Danmarks Kirker XII (The Churches of Denmark) Tisted Amt II, København, 1942, pp. 609—610) この「この」スクリプタ・メディ・アエリ・スクリプタの前で、スクリプタが司教座都市であったとの仮説を裏づけることが、(cf. Olaf Olsen & Pale Friis : *Sankt Olaf i Hjørring* (St. Olaf's in Hjørring) (Nationalmuseets Arbejdsmark, København, 1966), pp. 120—121.
- (11) Danmarks Kirker I : København I (København, 1945—1968), pp. 3—4, XX : Haderslev Amt I (København, 1954, p. 49.
- (12) J. P. Trap : *Statistisk-Topographisk Beskrivelse af Kon-*

- geriget Danmark (A Statistical and Topographical Description of Kingdom of Denmark), 5 vols. København, 1858—1860. J. P. Trap : Statistisk-Topographisk Beskrivelse af Hertugdømmet Schleswig (A Statistical and Topographical Description of the Duchy of Slesvig) I-III, København, 1864, reprint 1975. 特に注記した組合の著作から都市を引用した。
- (22) Henrik M. Jansen in : Jansen, Nyberg, & Riis : Danske byers fremvekst og udvikling i middelalderen, pp. 29—31.
- (23) Erik Levin Nielsen : De Byarkaeologiske undersøgelser i Viborg (Urban archaeology in Viborg) in : Henrik M. Jansen (ed.) : Arkæologi og Naturvidenskab (Skrifter fra Institut for Historie og Samfundsvidenskab, Odense Universitet, Historie), Odense 1975, p. 54. cf. Henrik M. Jansen : De danske byers opkomst og deres handelsrelationer i tidlig middelalder på grundlag af det sidste tiårs forskningsresultater (The Origins and early-medieval trade relations of Danish towns. A Survey of the last ten years' Research). (Från medeltid till valfartssamhälle. Nordiska historikermötet i Uppsala, 1974: Föredrag och mötesförhandlingar, Stockholm, 1976), p. 454.
- (24) H. stoob : Deutscher Städteatlas I, Dortmund, 1973.
- (25) 附論を参照せよ。
- (26) ルンドでは、二十世紀教会と礼拝堂があり、そのうち八教会は修道院に属した。R. Blomqvist : Lunds historia I : Medeltiden (A History of Lund, I, The Middle Ages) Lund, 1951, p. 154, cf. p. 109. ロッキンでは、二十世紀教会と礼拝堂がある。
- (27) Danmarks Kirker III : Københavns Amt I, København, 1944, pp. 164—165. これに對して、十四世紀前半ノルウェーのノルンでは、少くとも二十の教会と礼拝堂とやらに五つの修道院があった。またノルウェーの大司教座のあるニダロス (Nidaros) ノンハイム (Trondheim) では、同時期に、少くとも十四の教会と一あるいは二の養育院、市の内外に、四あるいは五の修道院があった。Knut Helle & Arneved Nedvittne : Sentrumsdannelse og byutvikling i norsk middelalder (The Formation of Centres and urban Development in Norway during the Middle Ages), in : Grethe Authén Blom (ed.) : Urbaniseringsprosessen i Norden I, p. 246. スウェーデンのマンナントでは、同じく多くの宗教施設は存在した。
- (28) Tore Nyberg in Jansen, Nyberg & Riis : Danske byers fremvekst og udvikling i middelalderen, pp. 45—46. (中略部分の表を参照)
- (29) リーアバーンブリゲは、聖トリニティ (St. Bridget) 会と集メ、ヤビーナは、カメル会に属す。
- (30) リーアバーンブリゲは、特にヤビーナと、かつての修道院の教会が、後に都市の教会となった。おそろひリーアバーン村のうちの教会は、聖ニコロイ奉獻され、町の中心地であったと考えられる。J. P. Trap : Danmark, (5th ed.) Randers Amt, København, 1963, p. 661.
- (31) Erik Cinthio : Variationsmuster in den frühmittelalterlichen Städtewesen Schonen (Kiel Papers, 72, ed. H. Hinz, Neumünster, 1973), S. 60. マンナントでは、修道院とれた中世の

- 都市トハシ、十ヶ世紀中葉の地図をかんじつ、ミヤコニケン
(Simishamn) ヲリヤスミナ(Țistad) の歴史トハシヲ説き及
りし。Christier Olofson : Problem ur Åhus aldsta historia
(Problems concerning the early History of Åhus) (Handlingar
angående Villands härads ugiyna av Villands härads Hem-
bygdsförening V, Kristianstad, 1945), p. 58. 400頁(ルナ
ノヤスミナ(Rönnowsgatan) ヲリヤスミナ) 街道の地図、十ヶ
世紀の城の基礎が築かれたり、都市の中心部分にあり現在に
残る、かんじつに及ぶ。400頁、都市トハシの地図、
十ヶ世紀の城、かんじつに及ぶ。Olofson, op. cit., p. 59.
- (23) Hermann Aubin : Die deutschen Stadtrechtslandschaften
des Ostens (in Carl Haase (ed.) : Die Stadt des Mittelalters
II, Wege der Forschung CCXLIV, Darmstadt, 1972), S. 226—
254. Vom deutschen Osten. Max Friederichsen zum 60. Geburts-
tag. Hrsg. von Herbert Knothe=Veröffentlichungen der Sch-
lesischen Gesellschaft für Erdkunde e. V. und des Geogra-
phischen Instituts der Universität Breslau, 21. Heft, Breslau,
1934, S. 27—52.)
- (23) Wilhelm Ebel : Lübisches Recht im Ostseeraum (in Carl
Haase (ed.) : Die Stadt des Mittelalters II), S. 275—276.
(Geisteswissenschaften der Arbeitsgemeinschaft für Forschung
des Landes Nordrhein-Westfalen, Heft 143, Köln/Opladen,
1967, S. 7—27.) 400頁、十ヶ世紀の城の特許状の
「城の所有者」起草者、かんじつに及ぶ。400頁、十ヶ世紀の
城。cf. Thomas Riis : Les institutions politiques centrales
- du Danemark 1100—1332, Odense, 1977, pp. 275—277.
- (24) Erik Kroman (ed.) : Danmarks gamle Kbstadlovgivning
till 1523 (The Legislation concerning Danish Towns till 1523),
I—V, København, 1951—1961 (以下 DGK と略す) 1, Slesvig
no. 1. 400頁、Niels Skyum-Nielsen : Kvinde og
Slave, (A History of Denmark 1085—1250) København, 1971,
p. 256, n. 6a.
- (25) DGK II Horsens no. 1, Ebeltoft nos. 2—3.
- (26) DGK II Hjørring no. 1.
- (27) DGK II Viborg no. 1, Varde nos. 1—2.
- (28) DGK IV Lund no. 1, Malmø no. 5, Landskrona nos.
1—2, Helsingborg no. 1, Engelholm no. 1, Ystad no. 1.
Tommerup no. 1, Væ no. 8, Åkirkeby nos. 1—2, 4, Nekst
no. 1, Halmstad nos. 3—4, S lvisborg no. 1, Elleholm no. 1.
- (29) DGK III Holbek no. 1.
- (30) DGK III Køge no. 1, Korsør no. 1, Saxk bing no. 3.
- (31) 400頁、Gerhard Eimer : Urbana grundtyper i
det medeltida Sverige. Formanalytiska undersökningar (Main
Types of Towns in Medieval Sweden) in : Nordisk medeltid.
Konsthistoriska studier tillägnade Armin Tuulise (Stockholm
Studies in History of Art XIII, 1967), pp. 303—304.
- (32) Eimer, op. cit. p. 296. 400頁、十ヶ世紀の城
図を参照せよ。C. G. Weibull : Sölvesborg 1445—1945, Sölves-
borg, 1945, pp. 90, 169.
- (33) DGK IV Sölvisborg nos. 1—2. 400頁、十ヶ世紀の城

- 紀前半から都市として存在していったことが、C. G. Weibull: *Salvesborg 1445—1945*, pp. 13—15. には、1335年頃の銅「ハ・キルト」に属する印章の母型の存在によって確認される。cf. Poul Bredo Grandjean: *Danske Gilders Segl fra Middelalderen (Medieval Seals of Danish Guilds)*, København, 1948, p. 33, pl. 9c.
- (25) Thomas Riis, in Jansen, Nyberg & Riis: *Danske byers fremvekst og udvikling i middelalderen*, p. 61.
- (26) Hans Stiesdal in J. P. Trap: *Danmark (5th ed.)*, Holbæk Amt, København, 1954, pp. 366—367. ヴィルヘルム・ラ・クール (Vilhelm la Cour) は「ノルデン (Cordel)」と呼ばれた城壁の外にある街区を郊外とみている。Dansk Borganlage til midten af det trettende århundrede (Danish Castles till the mid-thirteenth Century), I, København, 1972, pp. 271—272. 城壁をめぐらした都市内の教会が中世の終りまで教区教会とならなかった事実は、ステイスタルの仮説を支持している。しかし城壁内の上町の防備は、ヴァルデマール四世 (Valdemar IV, 1340—1375) の治世に推定すべきである。コペンハーゲンの国立博物館、中世・ルネッサンス部の紀要で、一九七二年二月二十三日「オーレン・ノルデンセン」によってなされた発掘報告 (以下NM2と略す) は、発掘の進展とともに、より古い防備を発見する可能性を排除している。
- (27) Skjurm-Nielsen: *Kvinde og Slave*, pp. 160—161. ニールス・スキューム＝ニールセン教授によって述べられた論議で、ヴォーディングボー城の礼拝堂は、十二世紀末の煉瓦作りの建物であることが付け加えられている。Danmarks Kirker VI: *Priester Amt I*, København, 1933—1935, p. 198. 私に知らぬが、ヴィルヘルム・ラ・クールによって述べられた仮説、即ち、十二世紀後半のヴォーディングボー城の建設以前に、後のヴォーディングボーに面する小島で物見の塔があったとする仮説は、今日まで確認されていない。Vilh. la Cour: *Om studiet af vore danske voldsteder (The Study of Danish Fortified Sites)* Historisk Tidsskrift 12 Series I, København, 1963—1966, pp. 173—177. したがら、一九七七年に行なわれた「モナ・ハービー」の後継の結果、十一世紀の海中の防衛杭と推定される杭が発見された。cf. *Paalepaerring under vandet* (Under-water Barrier of Piles) in: *Næstved Tidende*, 25. 7. 1977.
- (28) E. g. H. Hellmuth Andersen: *Årtus in der Zeit von 900 bis 1200 n. Chr.*, S. 100. 王國の收入表「スヤン・キー」の序論と解説が附かれて公開されている。Svend Aker(ed.): *Kong Valdemars Jordebog I-III*, København, 1926—1943.
- (29) Riis: *Les institutions politiques centrales du Danemark*, pp. 223—224, 283—310.
- (30) Poul Johs. Jørgensen: *Dansk Retshistorie (A History of Danish Law, 2nd ed.)*, København, 1947, pp. 309, 434, 534—535.
- (31) Dipl. Dan I 2 no. 21 (1085).
- (32) Skjurm-Nielsen: *Kvinde og Slave*, p. 8; Riis: *Les institutions politiques centrales du Danemark*, p. 285, n. 11.
- (33) 発掘は、むしろ「スウェーデン」Mogens Bencard: *Viking*

- Age Ribe (Kiel Papers '72 (ed. H. Hinz), Neumnünster, 1973, p. 85.
- (37) Vilh. la Cour : Om studiet af vore danske voldsteder, pp. 170—173, 183—184.
- (37) Volker Vogel : Ausgrabungen in Schleswig (Kiel Papers '72 ed. H. Hinz), Neumnünster, 1973, pp. 96—97.
- (37) ヨーレスビー (Jurisborg) とは同じである。La Cour : Dansk Borgenlæg I, p. 76. したがって ヨーレスビーの築 (1112 年—1114 年) をみても DKG I Sleavig no. 1, 830.
- (37) ヨーレスビーは、スウェーデンの築は 1110 年頃建設された。La Cour : Danske Borgenlæg I, pp. 250—255.
- (37) ヨーレスビーの築は今日の形では十四世紀第一四半世紀と形成されたが、1110 年頃の前身がある。たしかである。Kai Hrbj i Kulturhistorisk Leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationsstid (Dictionary of Scandinavian medieval Civilization, 以下 KL と略記す) XVI, København, 1971, col. 71.
- (37) Aksel E. Christensen : Scandinavia and the Advance of the Hansatics, in : Scandinavian Economic History Review V, 1957, p. 110. (Aksel E. Christensen : Danmark, Norden og Østersøen. Udvælgte Afhandlingar (Denmark, Scandinavia, and the Baltic. Selected Papers), København, 1976, pp. 138—139.)
- (37) ユニオン市の誕生は、十四世紀前半の頃である。Dipl. Dan. II 9 no. 140, III 3 no. 380. 十四世紀末、十四世紀の特許状では、国王の命で都市の形成と移転された。ユニオン市の中世都市の類型

- の DKG III, p. 123 1. 18—21. したがって ユニオン市の大聖堂の最も古い部分は、十三世紀前半に属し、もともと規模は、通常の村の教会堂より大きくて反論されるかも知れない。
- Danmarks Kirker II : Frederiksborg Amt I, København, 1964, p. 54. したがって、大聖堂の方位は、街路の方位に一致しない。反論がある。これらの諸事実は、都市プランの規則性が、大火後の再建によるものと結論を導くかも知れないが、しかし特許状は、明白に「朕 (国王) は「スローケン」 (オプスス海峽の入口にシラン島の岬) に、彼等 (都市民) が移住し、そこで生活し、新しい町を建てることを望む」とある。したがって「トントーン語」の「wy wele, at the ther vpa, Kroken scule flutte at bo oc ther en my kopsaeth bygge」 DKG III, p. 123, 1. 20—21. したがって同時代の他の特許状は、新しい町を移住し、そこで木造の家を建てた。五年間とわたって、または石造の家を建てた。十年間とわたって、税を免れることを記している。DKG III Helsingør no. 2. したがって教会が存在した場所へ、都市が移動した。仮定して、したがって。十五世紀第一四半世紀の教会の拡張は、現在の地では都市が移られた。ユニオン市は、ユニオン市。Danmarks Kirker II, Frederiksborg Amt I, p. 60.
- (37) Riis in Jansen, Nyberg & Riis : Danske byers fremvækt og udvikling i middelalderen, p. 71. Sven A. Nilsson : Halmstads Historia I (A History of Halmstad, 1968 pp. 285—288.
- (37) J. O. Bro-Jørgensen : Svendborg. Købstads Historie (A History of Svendborg) I, Svendborg, 1959, pp. 23—24 ; Thomas Riis : Hvor lå Svendborgs middelalderlige Fisketorv ?

- (The Location of the medieval Fish-Market of Svendborg) in: *Fynske Årbøger*, 1976, pp. 109—113.
- (82) DGK IV Engelholm no. 1; Ragnar Blomqvist in *KL* XVI, K København, 1971, coll. 622—623.
- (83) And. Ljung: *Ur Falkenbergs Stads Historia* (From the Past of Falkenberg 2nd ed.), Falkenberg, 1954, p. 270.
- (84) Elmer: *Urbana Grundtyper*, pp. 295—297, fig. 5 b (Laholm), fig. 6 (Sölvesborg). ニーホーの煉瓦建の (圓形マンナ) 教堂は、一二三五年から建設されたものとされる。cf. Axel Bjwetz: *Laholms Historia* (A History of Laholm) I, Laholm, 1961, p. 17.
- (85) Ljung: *Ur Falkenbergs Stads Historia*, p. 270. ニーホー以外の例として、スウェーデンの中心が挙げられる。Elmer, *Urbana Grundtyper*, pp. 301—302.
- (86) Jan Kock: *Orientering om byarkæologien i Ålborg* (A View of the archaeological Research in Ålborg), in: Henrik M. Jansen (ed.): *Arkæologi og Naturvidenskab*, p. 38.
- (87) DGK III Kerteminde no. 1.
- (88) マンネン・マ・ニールは、ステーションの都市と城は、ヴァルデマー二世 (Valdemar II, 1202—1241) の治世に建設されたと思定される。Dansk borganlæg I, pp. 244—246. 教会は、十三世紀の前半に建設された。Danmarks Kirker VI: *Præstø Amt I*, København, 1933—1935, p. 204.
- (89) Erik Kroman: *Hvor Gammel er Årskbing?* (How old is Årskbing?), *Fynske Årbøger* VI, Odense, 1956—1958, pp. 274—280.
- (90) 明らかだが、このことは、リンネコローピングについて、一八五八年のプランにまであてはまる。しかし、都市を貫通する街道は、この一八四〇年代に変更されたのである。Carl Lindberg Nielsen: *Ringkjøbing Købstads Historie* (A History of Ringkjøbing), Ringkjøbing s. a., 1943—1969, pp. 35—43.
- (91) DGK III Køge no. 1.
- (92) 一四四三年の特許状 (DGK II Ringkjøbing no. 1) は、国王カール・マクシミリアン三世 (Valdemar III, 1326—1329, 40—44, カール・マクシミリアン四世 (Valdemar IV, 1340—1375) のついでに、カール・マクシミリアン三世に与えられた特許を確認している。おそらく、ヴァルデマー三世であることがより蓋然性が高い。というのも、(リーヴの特許状の教会名の表に) リンネコローピングが最初に言及されている。一二三五年と想定される。cf. Lindberg Nielsen: *Ringkjøbing Købstads Historie*, p. 14. 教会は、ロネスタ風の石造のロマニスク様式であることが事実 (cf. NM 2: Chr. Axel Jensen, 日付も署名も不明) のアクセル・マクシミリアンによる註記より、一四四四年九月四日付のマーstrand (Marstrand) に宛てた H・パルダン (H. Paludan) の書簡より、一八九二年に、その他のロネスタ風の建築上の要素が都市のいくつかの部分に分散されたという事実 (一八九二年のビン郡 Hind Herred) の叙述、リンネコローピングを扱った MN 2 の写しも利用した) は、都市がロネスタ時代に即ち一二五〇年まで存在したことを証明しないが、教会堂の存在を示すものである。前出注四九のヘルミンコローの起源についての観察をよむ。

- (23) P. Johansen : Die Kaufmannskirche im Ostseegerbiet (Studien zu den Anfängen des europäischen Städtewesens, ed. Th. Mayer (Vorträge und Forschungen IV), Lindau-Konstanz, 1956, S. 508—510. Eimer : Urbana Grundtyper, p. 294. フォン・ハントの『メーレン』十三世紀のなかのページ。
- (24) 前田祐三『』を参照せよ。
- (25) ホルマンズは、ロスキレの王領が、今でも一〇〇〇年以前に建てられ、都市もほぼ同時代に建てられた。Ola Olssen : “Middelalderbyen” og Roskilde (The Research Project “the Medieval Town” and Roskilde), Historisk årbog fra Roskilde amt 1977, p. 3.
- (26) 前田祐三『』を参照せよ。
- (27) Thomas Riis : Le pouvoir central et les villes du Danemark XVe-XVIIIe siècles § VII, in : Thomas Riis & Poul Strømstad (ed.) : Le pouvoir central et les villes en Europe du XVe siècle aux débuts de la révolution industrielle, 1978.
- (28) Dipl. Dan. II 5 no. 358, cf. nos. 351—352.
- (29) Lars-Göran Kindström : En gammal stadsplan. En S-1-vestborsstudie (Studies in the Ancient Plan of Solvesborg) (Blekingeboken XLIII), Karlskrona, 1965, pp. 10—11.
- (30) 前田祐三『』を参照せよ。
- (31) Viggo Hansen : The Pre-Industrial City of Denmark. A Study of two Medieval founded Market-Towns. (Geografisk Tidsskrift LXXV), København, 1976, pp. 55—56.
- (32) “Matrikeldirektoratet” (Central Survey Administration)

デンマーク中世都市の類型

- København. 6つの地図を参照せよ。
- (33) Henrik M. Jansen : Et middelalderbysamfund tager form (Preliminary Report of the Svendborg Excavations in 1973), Fynske Mindes, 1974, Odense, 1974, pd. 183—184.
- (34) 前田祐三『』を参照せよ。
- (35) Niels Foged : Diatom Analyses. (The Archaeology of Svendborg, Denmark I), Odense, 1978, pp. 7—8, 17—19, 32—34, 86—87. 特に、図面五七八、五八〇、六一八の標本を参照せよ。
- (36) cf. Jan Kock : Orientering om byarkæologien i Ålborg (A Report on Excavation of Town / Ålborg), pp. 43—50, figs. 2—9.
- (37) Erik Schultz (ed.) : Registrant over bevaringsværdige huse i Svendborg gamle Købstad (Catalogue of Houses which ought to be preserved in the Centre of Svendborg). Svendborg, 1975. この著作は、スウェーデンの中心部にある建築史と歴史を研究する建築史の記録、そして十八世紀以降の所有者の表を収録している。この情報は、一七九〇年の国勢調査と十七年一年の火災保険台帳に基づき補完された。Landsarkivet, Odense : Svendborg magistrats arkiv litra J : Brandtaks tionsforretning 1791, & ibid. litra X : Hussegningsprotokol, 1790. 私にスウェーデンの南東部を例として用いた。
- (38) スウェーデンのチェーネーン (Chr. Hvenegård) は、リンド・タリステンセン (J. Tind-Christensen) 画測量官により、一九四九年に作成され、一九五九年に再調査されたプラン一一〇を

デンマーク中世都市の類型

参照せよ。これらの地図の収められている測量事務所のティン・クリステンセン氏に対し、この所蔵する地図、土地台帳の閲覧を許されたことに感謝するものである。

訳者あとがき

本稿は、一九七八年四月二十二日、立教大学で開かれた「比較都市史研究会」第七十四回例会で行なわれた講演をもとに、リース博士により加筆、注記された論考を訳出したものである。本稿は、トーマス・リース、鵜川馨訳「デンマーク中世都市の法的・社会的諸問題」(『立教経済学研究』第三十二卷第二号所収)、および、トーマス・リース、鵜川馨訳「デンマークの国制——一〇〇年——一三三二年——」(『立教大学経済学研究』第三十二卷第三号所収)とともに、三部作をなすもので、上記の二論考とも併せ参照されたい。また、「日本学術振興会の外国人招聘研究員制度(昭和五十三年度短期)による今回の国際学術交流の成果を、本稿の発表をもって一応締めくくることがする。

訳出にあつて、今回も、デンマーク史、デンマーク語、デンマークの地名等について、早稲田大学の村井誠人講師から、貴重な、数々の御教示を得た。前稿で看過していた誤りを訂正することができた。記して感謝したい。